
ハヤテのごとく！ 「クリスマスの悲劇 ～ナギが密室殺人！？～」

たまむし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！ 「クリスマス悲劇」ナギが密室殺人！？

【Nコード】

N4942M

【作者名】

たまむし

【あらすじ】

「お嬢様、今度のエピソードはミステリだそうですよ」「なんだと！？ 一体誰が被害者なのだ？」「お嬢様だそうです」「え？ヒロインが殺されてもいいものなのか？」「舞台は三千院邸、事件が起こるのは猛吹雪のクリスマスの朝。そういえば僕も以前クリスマス朝に死線をさまよっていましたね」「まああの時もハヤテは何度も死にそうになって生きてたからな、今回もそういうオチだろう」「でもこれは本編と無関係な二次創作だから、別にヒロインが

死んでもよくね？ と作者が申しております」「何だと！？ 一体誰が私を殺すのだ？」「その辺はご自分で読みになってお確かめください」

朝の見回りをしていると、マリアは咲夜に出会った。

昨夜はクリスマスパーティーだったのだが、猛吹雪のため咲夜たちは帰ることができず、屋敷に泊まったのだった。

マ「あら咲夜さん、おはようございます。お早いですね」

咲「おおマリアさん、おはようさん。ところでナギ見なかった？」

マ「いえ、見てませんけど。……確か咲夜さんはナギの部屋に泊まっただしたよね」

咲「そや。でも目が覚めたらいらへんのや」

マ「え？ 昨日はそんなに早く寝たんですか？」

咲「いや、帰らんでいいからってみんなで夜中まで遊んどったから遅かったで。まあナギはあんまり機嫌ようなかったみたいやから、寢室に戻ったらすぐ寝てしもたけど」

マ「変ですねえ……ナギはいつも起こしに行っても寝坊するぐらいなのに。じゃ、私ちよつと屋敷を探してみます」

咲「それなら大丈夫や、さつき借金執事に頼んどいたから。えらく心配しとったわ。よっぽどナギの早起きが信じられなかったんやな」

マ「そうですか。でも念のため私も心当たりを探してみますね」

咲「頼みます。ウチはまだ眠いからもう一眠りするわ」

昨夜はあくびをしながら去って行った。
マ（ナギがこんな早く起きるなんて確かに珍しいですね。でもたぶんなんとなく目が冴えてしまつてゲームでもやってるのでしょうか）

というわけでマリアはゲーム部屋に向かった。

今日はクリスマス。

イブはクリスマスパーティーだった。

パーティーに参加したのはナギ、ハヤテ、マリア、昨夜、ヒナギク、
歩。

いつもは親戚や関係者を呼んで盛大なパーティーをやるのだが、今

年はナギの意向で仲間内だけの小さなパーティーをすることにしたのだった。

人と関わるのが嫌いなナギが珍しく出した希望である。親戚や関係者への通知は大変だったが、せっかくナギが人と関わりうとしているのだからと思い、クラウドとマリアは喜んでナギの希望を汲んでやった。

呼んだのは基本的にナギの幼なじみで、ハヤテも希望があれば友人等と呼んでいいことになっていた。

しかしワタルは頼んでいたバイトの男女が店のバイトをドタキャンしたという理由で来れなかった。

「クリスマスに男女でバックれるとか仕事なめんなちくしょう俺だって伊澄とバックれてえよ」

サキ「クリスマスに女の子と二人で過ごすなんて若には十五年ぐらい早すぎます。……でもその頃は私はもう三十五……。って別に私が若とクリスマスを過ごすってわけじゃないですからね!!」

などと欠席の連絡の際に電話口から聞こえてきたのをマリアは覚えてる。

伊澄はいつも通りの迷子で、今度はナギの家に来るはずが国際宇宙ステーションに来ていたということだった。次はきっと平行宇宙とかに行ってしまうに違いない。

そして結局参加する幼なじみは咲夜だけになった。

ハヤテはいつも通りのラブコメ展開があーだこーだとあって歩とヒナギクを呼ぶことになった。昨夜も同級生の美少女二人と甘く切ないあれやこれがあったのだがここでは省略する。

ついでに言うておくとクラウドとタマは慰安旅行中だ。クラウドが一人で旅行に行くのが寂しいとこねたので、ナギがタマを連れて行かせたのだった。マリアと二人で行くわけにも行かないしハヤテとナギは学校があったので仕方のない処置である。とはいえ意外に仲のいい二人であり、文句を言いながらもクラウドは楽しそうではあった。

そういわけで参加者は総勢六人になり、ナギの希望通りの小さなパーティになったわけだが、ナギはあまり楽しそうではなかった。

なぜかという、ナギはハヤテと喧嘩をしていたのだ。

数日前、ナギは自分の描いたマンガをハヤテに見せて批評してもらったのだが、そのときにハヤテがあまりに酷評してしまった。もちろんハヤテは最初は作品を適当に褒めていたのだが、ナギに忌憚のない意見を聞きたいとしつこくせばまれ、ついには正直に多くの欠点を指摘してしまった。それでナギはひどく怒ってしまい、それ以来ナギはハヤテと口を聞かなくなってしまったのだった。

全面的に悪いのはナギなのだが、まあいつも通りのわがままである。マリアはそれ程気にしていなかったし、ハヤテにもいつものことだから気にしないように言っておいた。それでもハヤテは自分の言動を後悔していたようだが。

とはいえ、ナギとハヤテはどこか物足りなそうだったものの、残りのメンバーはパーティを楽しんだ。特に咲夜は歩とヒナギクがハヤテに気があることに気付き、二人をからかって大満足のようにだった。

そうしてそれなりにパーティは盛り上がったわけだが、さあ帰ろうというときには朝から降っていた雪が猛吹雪になっており、外を一步步くことも難しいくらいになっていた。この辺りはどういふわけか都内にも関わらずそんな猛吹雪になることがあるのである。とはいえ空調も食料の備蓄も十分な三千院邸にいれば安心である。パーティの参加者は全員屋敷に泊まることになったのだった。

咲夜がナギの部屋に泊まることになったので、マリアは久しぶりに一人で床につくことができた。一人でゆっくりと読書をして過ごす夜は楽しく、目覚めても機嫌のよいマリアだった。

と、ゲーム部屋に近づくとハヤテが息せき切って駆けてきた。

ハ「マリアさん！！」

マ「ど、どうしたんですかハヤテくん、そんなに慌てて」

ハ「ゲーム部屋が開かないんです！」

マ「ゲーム部屋が開かない……？　おかしいですね。中に誰もいないんですか？」

ハ「他の場所にいなかったんでお嬢様がいると思うんですけど、いくらノックをしても返事がないんです！」

屋敷の部屋はナギの便宜のためにほとんど施錠していない。住民が少ないのでそれでもセキュリティ上の心配はないのである。

ナギも中にいるときにいちいち鍵を閉めたりはしないから、基本的に鍵が利用されることはない。

だから確かに鍵がかかっているのは異常事態ではある。

マ（でもそんなに焦るほどのことじゃないんじゃないかしら？　大方、気まぐれで鍵を閉めてゲームをやっていたナギが早起きしすぎて眠ったぐらいのことでしょう）

マ「じゃあちよつと確認してみますね」

マリアはゲーム部屋の前に立つと、ドアの取っ手を握って押し引き引いたりしてみた。しかしドアは開かなかった。

マ「確かに鍵がかかっているようですね」

ハ「だからそう言ったじゃないですか。マリアさん、早く鍵を持って来てください！」

マ「わかりました。すぐに持って来ますね」

この屋敷の鍵は全てマリアとクラウスが管理している。ほとんど施錠することがない屋敷で、施錠の仕事はマリア一人で十分なのでハヤテには鍵を持たせていない。

クラウスは旅行に行く前に鍵を全てマリアに預けたので、現在の屋敷の鍵を使えるのはマリアだけである。

マリアは自室に戻るとポケットから鍵を出して金庫を開いた。普段使わない鍵は全てこの金庫に入れてあるのだ。ゲーム部屋の鍵を選ぶと、ハヤテのいる場所へ向かった。

ハヤテが見えてくると、

ハ「何のんびりしてるんですかマリアさん！　早く来てください！」

ハヤテが急かすのでマリアはハヤテの元へと走った。

マ「そんな焦ることないんじゃないですか？」

ハ「何言ってるんですか？ お嬢様はこんな早起きしたことも鍵をかけたこともないんですよ！」

マ（でもそれ以上に気まぐれも多いと思うんですが……。まあ部屋の中を見れば安心するでしょう）

マリアがドアに近づくと、ハヤテは右手でマリアから強引に鍵を引ったくった。

マ（なんて乱暴な。本当に心配してるみたいですね……）

ハヤテは鍵を鍵穴に入れると、荒っぽく鍵を回し、鍵を外しもせずに両手を広げてドアを押し開いた。

中は電気が付いておらず、よく見えなかったが……

マ「ナギつつつつ……！」

ハ「お嬢様……！」

部屋を中心ではツインテールの後ろ姿が天井からぶら下がっていた。

体系から判断してそれは明らかにナギの後ろ姿だった。

ロープは天井から垂れていて、ナギの首のすぐ上で二手に分かれ、首の両脇へと消えていた。

（まさかナギが……首吊り自殺！？ そんな……まさか……。いえいえ、きつと冗談に違いないわ。これもナギの気まぐれに違いないわ……。というかどうか気まぐれであってください……）

ハヤテは疾風のような速度でナギの元に近づくと、天井からロープを引きちぎり、ナギを床に寝かせた。

ハ「お嬢様、しっかり……！」

ナギをゆすつて見るが反応はない。

ハヤテは恐る恐る右手をナギの首筋に伸ばした。

ハ「脈が……ない」

ハヤテは凍り付くような声で言った。

マ（えっ……？ そんな……ナギが……だって……ねえ？ えっ……

……でも……まさか……）

マ「いやああああああ！！！！」

悲痛の叫びが屋敷中に響きわたる。

マリアは衝撃のあまり部屋の入り口でへなへなと座り込んでしまった。

咲「ど、どないしたんや！？」

悲鳴を聞きつけて咲夜が部屋に駆けつけた。

咲「マリアさん、なんでそんなところに座り込んでるん？」

マ「ナ……ナギ……ナギが……」

マリアは震える手で部屋の中央を指差した。

咲「なんや、暗くてよう見えへんな」

その時、歩とヒナギクも部屋に訪れた。

ヒ「すごい悲鳴が聞こえたけど、どうしたのマリアさん？」

西「そこにいるのは……ハヤテ君？」

咲「えっと、電気は電気は……と」

咲夜は入り口の側のスイッチを入れて、部屋の電気を灯けた。

ナギを抱きかかえて座り込むハヤテの姿と、近くに無造作に倒れている椅子が浮かび上がる。ナギの首からはロープが伸びていた。

咲「なんや首吊りしたみたいな状況やなあ？　もしかして演劇の練習でもしてるんか」

ハ「ふざけないでください咲夜さん！！」

ハヤテが真剣な怒声を咲夜にあびせる。

咲「な、何そんなに怒ってるんや借金執事？　普通の突っ込みやないか。まさかナギが本当に首吊りするはずあらへんし」

ハヤテは無言。

咲「え……何？　まさか……」

咲夜はハヤテとマリアを交互に見ると、徐々に青い顔になっていき……

咲「そんな……まさか……ハハハ、冗談やろ？　冗談やよね？」

ハ「冗談じゃ……ありません。お嬢様は……もう息をしていないんです」

咲夜は顔面蒼白になった。

ヒ「そんな……ナギが……自殺？」

西「ありえないよ！　ありえないんじゃないかな、そんなの！！」

歩もヒナギクも落ち着きを失った様子だ。

咲夜とヒナギクと歩はハヤテの方に近づこうとした。

が、

ハ「近づかないでください！！」

ヒ「え、どうして？」

ハ「首を吊った後の顔ってどうなるか知ってますか？　顔が充血して……真っ黒になって……。この顔は……とても他人に見せられるようなものじゃありません。お嬢様は女の子です。こんな顔を人にそれも親しかつた人たちに最後に見られることを望むはずがありません。だから、どうかこの顔は見ずに、元気だった頃のかわいらしいお嬢様の顔を覚えておいてください……」

ヒ「そう……わかったわ」

三人はその場で足を止めた。

ハ「ナギお嬢様……」

ハヤテは悲痛な声で主の名を呼ぶと、ポケットから出したハンカチを静かに顔にかぶせた。ヒ「ねえハヤテ君、ナギは……本当に自殺したの？」

ハ「……何を言うんですかヒナギクさん？」

ヒ「だって、ナギが自殺するなんてあり得ないわよ、普通に考えて」
西「そ、その通りなんじゃないかな。ナギちゃん、昨日は確かにハヤテ君と喧嘩してて機嫌悪かったけど、『じゃあ私がもらっちゃおっかな』って言ったとき『ハヤテはこれからもずっと私のものだ』って強がってたもん」

ハ「……僕がこの部屋に入った時、この部屋には鍵がかかってました。マリアさんも確認しましたよね」

マ「え、ええ」

ハ「それに、見てください。窓の鍵は全て施錠されています。窓の

鍵は内側からしか施錠することができません」

ヒ「確かにその通りね」

ハ「そしてドアと窓以外にこの部屋と外を出入りする手段はありません」

ヒ「……何が言いたいなのよ？」

ハ「つまりもしお嬢様が殺されたとするなら、犯人は殺した後にドアを外から施錠していなければなりません。でも現在この部屋の鍵は全てマリアさんが管理しています。……ヒナギクさんと西沢さんはマリアさんを疑うんですか？」

ヒ「そんなことはないけど……」

西「マリアさんがナギちゃんを殺すわけないよ」

ハ「でしょう？ 信じたくはないですがお嬢様は自殺したんです……」

……

ヒ「……で、でもナギの自殺だっただってマリアさんがナギを殺したってことと同じくらい信じられないわよ。それに他に犯人がいて、その人は何らかのトリックを使って部屋を施錠したのかもしれないわ」

ハ「でも外は昨日の晩からずっと猛吹雪で、外から人が入ってくることもなんてありえないですよ」

ヒ「でもその前からこの屋敷に潜んでいたのかもしれないでしょ。」

……とにかく、今この部屋を搜索するぐらいのことはした方がいいと思うわ。この部屋から出たことがあり得ないならこの部屋のどこかにまだ隠れてるのかもしれないし」

ハ「そうですね……。誰もいないでしょうけど……」

ハヤテたちはマリアを除いて部屋の搜索を始めた。

マリアは足が震えてしまつて入り口の側から動けなかった。

マ（確かにナギの自殺なんてありえせんわね。でもだとすれば誰がナギを……？ どうやって部屋の施錠を……？ 確かに鍵はずつと私の部屋の金庫の中だったはず。もうちょっと冷静に考える必要がありそうですね）

マリアは部屋を搜索するハヤテに一つ奇妙な点を見つけた。
ハ（それにしても、ハヤテ君はなぜずっと右手をポケットに入れて
いるのでしょうか？）

*

ゲーム部屋の搜索の結果は、結局何も見つからなかった。
現場保持を考慮して、ハヤテたちはその部屋を離れた。

携帯でSPや警察に連絡を取ったが、猛吹雪のためにすぐに屋敷
に来るのは難しいということだった。

もしかしたらこの中に、もしくは別に犯人がいるかもしれないの
で、ハヤテたちは安全のために全員でリビングに集まった。

西「でもやつぱりナギちゃんの自殺なんて考えられないよ。だから
つてこの中に犯人がいるわけないし……やつぱり誰か他の人が犯人
なんじゃないかな」

ヒ「歩、私は飽くまで可能性の話をしているの。私だって自殺もこ
の中に犯人がいるのもあり得ないと思うわよ。でも他の犯人がいる
可能性も同じくらいあり得ないわ。だったら全ての可能性を検討す
るしかないでしょ？」

西「確かにそうだけど……」

マ（西沢さん、少し変な気がしますね。妙にナギの自殺を否定した
がっているように見えます。万が一西沢さんが犯人だったとしても、
自殺を否定するのはおかしいですし……妙ですね）

咲「ウチもナギの自殺だけはあり得んと思うなあ。生活にも人生に
困つとらんし……まあ確かに以前は家族のことであって目が虚ろだ
ったこともあったけどな、借金執事が来てからはすっかり元気や。
楽しそうでウチがうらやましかったぐらいや。昨日は喧嘩しとった
みたいやけど、それかていつものことやろ？ そやから自殺なんて
するわけないんや。いっとくけどウチは、ナギをこーんな小さい頃
から知つとるんやで。そのウチが言っんやから間違いないわ」

マ（まったくその通りです。ところで咲夜さんが犯人である可能性は……？　あり得ませんね）

ヒ「みんな落ちついて聞いて。ナギの自殺があり得なさそうな以上、この事件が殺人である可能性は十分にあるわ。首吊りは偽装ってことね。犯人はこの中にいるかもしれないし、他にいるかもしれない。いずれにせよ、その人は危険人物の可能性がある。次の事件を引き起こさないとも限らない。それを避けるためにも、その犯人をなるべく早く特定する必要があるわ……」

マ（ヒナギクさん、こんな状況だっていうのに冷静で立派ですね。私なんか頭の中がぐちゃぐちゃだっていうのに、さすがは現生徒会長だけあります。でもちよつと冷静すぎるんじゃない？……。まさかヒナギクさんが犯人？　……いえいえ、そんなことあるわけありません。ちよつとでも彼女を疑った私がバカでした）

ヒ「……でも昨日からずつと猛吹雪で外部からの侵入が難しい以上、他の犯人がいる可能性は低い。というわけで、まずはここにいるメンバーが犯人である可能性を検討するべきだと思うわ。みんなを疑うのは心苦しいけれど、もしこの中に犯人がいればその他のみんなの身が危険になる。だから例え疑われても気を悪くしないで欲しいの。もちろん私も犯人候補の一人ってことになるわね。いいかしら？」

全員が無言だった。

ヒ「それじゃあまず、アリバイの確認をしましょう。ハヤテ君、ナギは死んでからのどのくらい経っていたと思うかしら？」

ハ「はい、まだ顔や首の死後硬直が始まっていませんでしたから、そうですね……亡くなってから二時間は経っていないと思います」
咲「やけに詳しいやないか。どこで死亡時刻の推定方法なんて覚えてんや？」

ハ「小さい頃死体洗いのバイトをしていたことがありまして……」
マ（さすがハヤテ君、人生経験が豊富すぎますね。ところで残酷なゲームなどは年齢制限がありますけど、死体洗いは小さな子供がや

ってもいいものなのでしょうか……)

ヒ「っていうことは、殺人だとすれば殺害時刻は今から二時間半前以降ってことね。その時間は私は歩と同じ部屋に寝ていたわ。そうよね歩」

西「うん、その通りだよ」

咲「でもどつちかがこつそり抜け出した可能性はなくなるんじゃないんやないか」

西「抜け出してないよ」

ヒ「まあ咲夜ちゃんの言うとおりその可能性はなくならないわね。そう言う咲夜ちゃんはどうなのかしら」

咲「ウチはナギと同じ部屋に寝とったから全然アリバイにはならへんな」

ヒ「ハヤテ君は？」

ハ「僕は一人で寝てました」

ヒ「そう、じゃあマリアさんは？」

マ「私も一人で寝てました」

ヒ「そう……じゃあ誰もアリバイはないって考えていいわね。次は動機を考えてみましょう。……そうね、ナギを殺して得をする人って誰かしら？」

咲「まあヒナギクさんの言うとおりあり得ない可能性の話やけど、借金執事はどうや？ ナギが死んだら借金がなくなったりはせえへんのか？」

マ「そんなことはありません。ハヤテ君の借金は正式なものです。ナギが死んでも借金は親戚の誰かに財産と共に相続されます。むしろナギが死んだら現在の甘々の返済条件が厳しくなってハヤテ君にとっては不利な結果になる可能性が高いです」

ハ「そうですよ。それに僕はナギお嬢様の希望でここで働かせてもらってるんですから、お嬢様がいなくなったら仕事にあぶれちゃいますよ」

咲「確かにそやな。となると、色恋沙汰かもしれんな」

ヒ&西「!!」

咲「西沢さんとヒナギクさんには昨日のろけ話をたっぷりきかせてもろたからなあ。まあもちろん疑うつもりはあらへんけど、借金執事に付きまとうナギがいなくなったら、借金執事を好きな人は得をするってゆっていいんじゃないのか」

西「そ、それはいくら何でもひどいんじゃないかな。確かに、私は、ハ……ハヤテ君のことが、す……す……好きだけど、だからってライバルを殺そうなんて思うわけないよ。ヒナさんだって同じだよ」
ハ「そうですね、咲夜さん、西沢さんたちを疑うなんてひどすぎますよ。そんなこと言ったらマリアさんだって……」

マ「は、私が……？ 私ハヤテ君を好きだなんて言ったことありませんよ」

ハ「でも時々そういう視線を感じるっていうか……。なんだか思わせぶりなセリフを言うことも多いし……」

マ「もう、うぬぼれないでください！ 私がハヤテ君のことを好きなわけじゃないじゃないですか」

咲「怪しいな。ウチもマリアさんが借金執事のことをじっと見てるの時々みかけるで」

マ「咲夜さんまで……。そんなこと言ったら咲夜さんはどうなんです？ 以前言ってませんでしたっけ？ 自分はお兄ちゃんに憧れて、ハヤテのことをお兄ちゃんみたいと思うことがあるって。それなら、咲夜さんだって、ナギを疎ましく思う理由があるんじゃないですか？」咲「そ、そんなことないで。ウチは確かにそうゆうたけど、別に色恋沙汰と違って兄妹愛の場合は独り占めしたいなんて欲求はわかんはずや。だいたいマリアさんかて……」

ヒ「はいはいもうやめて。そんな調子でいくら議論したって実のある結果は生まれないわ。重要なのは、結局の所ハヤテ君以外は全員ナギを殺す動機を持ち得るってことじゃない？ そして程度の違いはあれ誰の動機も実際はナギを殺す程には思えない。つまりはこの中に犯人がいたとして、動機はほとんど犯人特定の役に立たないっ

てことよ。……結局誰もアリバイがないし、動機はあってもナギを殺す程じゃない。こうなると、手段から絞っていくしかないわね。ナギが首を吊らされていたたすると、少なくともナギを事前に殺すか生きたまま首を吊らせなきゃいけない。そのためにはナギを持ち上げたり、抵抗するナギを押さえ込むことができればいいんじゃないと思うんだけど……ナギはの中で一番軽いし、力も一番ないから誰にでも可能よね……となると、やはり密室だったという事実に注目せざるを得ないわね。マリアさん、さっき鍵はマリアさんが管理してるってハヤテ君が行っていたけど、本当なんですか？」

マ「え、ええ、本当です。ゲーム部屋の鍵とマスターキーを含めて普段使わない鍵は全て私の部屋の金庫に入ってます。クラウスさんの持っている鍵もありますが、それらは全て私に預けて行きましたので、ゲーム部屋を開けられたのは私の部屋の金庫に入っていた鍵だけです」

ヒ「マリアさんが寝ている間に鍵を盗まれた可能性は？」

マ「それもあり得ません。部屋には鍵をかけていますし、唯一の金庫の鍵は身につけて眠っていました。……だ、だからって私がナギを殺したわけじゃないですよ」

ヒ「わかってますマリアさん。でも他の可能性があり得ない以上、今のところマリアさんを疑うのも無理はないんじゃないでしょうか」

西「そ、そんなまさかマリアさんがナギちゃんを……」

マ「な、何言ってるんですか！ 冗談も程々にして下さい！ 私がナギを殺すわけじゃないじゃないですか。確かにナギには手を焼かされていますけど、私はナギを家族のように考えています。家族だと思ってる人を殺す人なんているわけないでしょう？」

ヒ「落ちついて下さいマリアさん。飽くまで可能性の話です。動機がないのは誰も同じなんです。でも手段を考えるとマリアさんしか考えられない。何かそれを否定する証拠があればそれを示してくれれば……」

咲「ちよっと待ちやヒナギクさん。何かおかしいで。仮にマリアさ

んが犯人だったとして、何でナギを殺した後部屋に鍵をかける必要があったんや？」

ヒ「そ、それは……」

咲「マリアさんは外から部屋の鍵をかけられるのが自分だけだって知ってたんや。なのに鍵をかけたら、まるで自分が犯人だって言うてるようなものやないか」

ヒ「……何が言いたいのか？」

咲「つまり、誰かがマリアさんを犯人だと思わせるために、わざわざ鍵をかけたんやないかってことや。まあ、犯人がマリアさんが鍵を管理してることを知らなければ、鍵を管理してる誰かをはめようと思っただけにもなりそうやな」

西「で、でもマリアさんしか鍵を持っていないってことは、犯人は内側から鍵をかけたってことだね。だとしたら犯人はどうやって鍵をかけた状態で部屋から逃げたのかな？」

咲「そやな、そこが問題や。でもそれが犯人の思惑なのかもしれない。犯人は不可能なことを成し遂げることによって、自分の犯行が不可能だと思わせたいのかもしれない。確かに窓の鍵は閉まっていたし、他に出入り口らしいものはなかった。……マリアさん、あの部屋には抜け穴とかないんか？」

マ「ないですね。この屋敷の大規模な改築の際に私は工事を監督していましたが、それは確かです」

咲「それやったら外から鍵をかけることは不可能なんか？ そやな、例えば内鍵に糸をひっかけて外から引つ張るとか」

マ「不可能でしょう。この屋敷の内鍵のレバーは非常に重いんです。力の弱いナギはそれが嫌で、自分の部屋の鍵を交換したぐらいです」

咲「そうかー、となると他に方法は思いつかんなあ……」

西「ねえ、部屋は本当に密室だったのかな？」

咲「うん？ どういうことや？」

ヒ「いやその、別に深い意味はないんだけど、犯人が鍵のかかったまま外に出たって考えるよりは、鍵がかかったのが勘違いだって

考える方が自然だと思つて」

ハ「鍵は確にかかつてました！ 間違いありません」

咲「何そんなにムキになつてるんや借金執事……。 うん……。 借金執事？ うん？ うん？ …… ああ、そや！ ウチ、犯人がわかつたかもしれん」

一同「ええっ！！」

咲「ところでマリアさん、マリアさんがナギの部屋に来たときのことを詳しく教えてくれへんか？」

ハ「それなら僕が……」

咲「借金執事は黙つとき！」

マ「ええと、私がゲーム部屋に近づくと、ハヤテ君が私の元に息せき切つて走つてきて、ゲーム部屋が開かないと言いました。部屋の前に行つて私も確認してみました。やはり鍵がかかつてました。私はハヤテ君に急かされて部屋に鍵を取りに戻りました。鍵を持つて戻ると、ハヤテ君が私の鍵を奪つて、部屋の鍵を開けました。私たちはナギの首吊りを発見し、ハヤテ君が死亡を確認すると、私が悲鳴を上げました。すると咲夜さんが来て、後は咲夜さんの知つてる通りです」

咲「なるほど、ウチの思つた通りや……」

西「一体何がわかつたのかな。もつたいぶつてないで早く教えてよ」

咲「なあ借金執事、なんでさっきからポケットに右手を入れてるんや」

ハ「え……。？ それはその……。そう、主の不幸の際には右手の親指を見せないのが執事の掟だつてクラウスさんが……」

咲「うそつくな借金執事！ 手えみせてみい！」

ハ「何にもないですよ。本当に何にもないですつて」

咲「なら見せてもいいはずやないか。さあマリアさん、そつちから借金執事を押さえて！」

マ「は、はい」

ハ「だから何にもないですつて！」

咲夜は強引にハヤテの右手を引っ張り出した。

ハヤテの右手には特に変わったところはないかに見えた。
しかし……

ハ「ほら、別に何もないですよ」

咲「ちよつとその人指し指親指から離してみい」

ハヤテの手は人指し指と中指が親指と不自然に接触していた。

ハ「なんでそんなことしないといけないんですか！」

咲「いいから離してみい！」

咲夜は無理矢理ハヤテの手を取って指を引き離そうとした。

ハ「いたたたいたた、ちよつと咲夜さん辞めて下さい」

咲「なんで離れないんやろな、その指は」

ハ「そ、それは……あの、主人の不幸の際には親指と人指し指は決して引き離してはいけないってクラウドさんから……」

咲「ああもしもクラウドさん」

咲夜は携帯電話を耳に当てていた。

咲「ちよつと聞きたいんやけど主が亡くなったときに人指し指と親指を離したらあかんって借金執事に言ったことあるん？……さよか。旅行中すまんなあ。ほんならまた。……というわけでクラウドさんはそんなこと言つとらん言うところで。何でそんな嘘をつく必要があるんやろな」

ハ「くっ……！」

咲「これでみんなも納得してくれるやろ。犯人は借金執事や」

一同「ええっ……！」

西「どどどどどうしてハヤテ君がナギちゃんを殺さなきゃいけないのかな？それに密室だったのにどうやって??」

咲「まあ落ちつきや。トリックは簡単や。部屋はもともと密室やなかったんや。ハヤテ以外でドアが開かないことを確認したのはマリアさんだけ。要はマリアさんに鍵が閉まってると思い込ませれば、借金執事はみんなに部屋が密室だったって思わせることができたんや」

西「で、でもどうやって？」

咲「簡単や。瞬間接着剤でドアをくっつけてたんや。そうやってマリアさんに鍵がかかってるって思い込ませて、マリアさんがいなくなったときに強くドアを押してドアを開けた。そしたらマリアさんが戻ってきたときに鍵を引たくって、鍵を開けるふりをしたってわけや。借金執事も焦ってたんやろな、ドアに瞬間接着剤をつけるときに液が指に着いてしまい、指が離れなくなった。それが見えないうちにずっとポケットに手を入れてたってわけや。そやな、借金執事！」

ハ「……」

咲「黙ってたらわからへんで！」

西「ま、まさかハヤテ君、そんなことしてないよね！　ねえ、してないって言ってよ！」

ハ「クククク……」

ハヤテは不敵な笑いを浮かべる。

西「ハ、ハヤテ君……？」

ハヤテはうつむきがちだった顔を上げた。

その目はいつものハヤテのものではなかった。

マ（この目……どこかで……。そう……そうです、思い出しました。あのイブの夜、行き倒れのハヤテ君に初めて会った日。あの時のハヤテ君は、確かこんな目をしていました。まるで親の敵を目前にした少年のような冷たく生気のない目……。もう二度とあんなハヤテ君を見ることはないと思っていたのですが……）

ハ「そうです。僕がやったんですよ」

その目にふさわしい、冷気を帯びた声だった。

西「なななな何でかな！　何でハヤテ君がナギちゃんを殺さなきゃいけなかったの！？」

ハ「……うんざりしたんですよ。もうあんなわがままで自分勝手なお嬢さんの相手はしたくない。この前だって僕は親切でマンガの批評をしてあげたっていうのに、勝手に怒り出して僕と口をきかない

とか言つて……もう本当にうんざりなんですよ。これからはこんなふざけた仕事からは解放されて自由に生きるんだ！……僕はそう決めたんです」

マ「で、でもハヤテ君、さっきも言いましたけど一億五千万円の借金はずなぎを殺しても消えませんか……」

ハ「わかつてますよそんなの。でもお嬢様に手をかけた僕は悪魔に魂を売った身です。そんな僕なら一億五千万円ぐらいすぐに返せますよ。僕をさらって一億五千万円を作ろうとした人と同じようなことをしてね……」

ヒ「で、でもハヤテ君。そのためにマリアさんに罪をなすりつけようとするなんてひどいわよ！ マリアさんには、たくさんお世話になったんでしょ？」

ハ「何度も言わせないで下さい。僕は悪魔に魂を売ったんです。一人犠牲にするぐらい、わけないですよ。お世話になったとか関係ありません」

マ（まさかハヤテ君が犯人だったなんて……。ということは朝ゲーム部屋の近くで出会ったときに興奮してたのも演技だったんですね……あれっ？ 出会ったとき？ ……何かがおかしい気がします。）

……ええと……確か。そうです！ ハヤテ君は鍵を右手を使って開けていませんでしたっけ？ そしてドアは両手を開いて押し開いていたはず……。そうです、あの時は確かにハヤテ君の指はくっついていませんでした。私を騙すために瞬間接着剤を使ったのはその前のはずですから、咲夜さんの言うことが正しいければハヤテ君のトリックは事実と矛盾します。……どういことでしょうか？）

マ「ハヤテ君、もしかして何か嘘をついていませんか？」

ハ「え？ 何言ってるんですかマリアさん。僕が嘘をつく理由なんてありませんよ」

マ「とばけないでください。私と会ったとき、ハヤテ君は右手を使って鍵を開けましたよね？ そのときは手は確かに手はくっついていませんでしたよ」

ハ「そ、そんなことはありませんよ。……僕は右手がくっついてるのをバレないように巧妙に行動してたんです。マリアさんはそれに騙されただけですよ」

マ「いいえそんなことはありません。そんな手で鍵を開けたらどうしても不自然な動作になりますから見れば誰だってわかります。それにドアを押し開いたときは確かに両手が開かれてました。大体ハヤテ君がナギを殺すなんておかしいんです。正直に言ってください」
ハ「正直に言ってます。僕はこの手でお嬢様を殺し、マリアさんに罪をなすりつけるために瞬間接着剤で鍵が閉まってるようにマリアさんに思い込ませたんです。そもそも僕が犯人のふりをして僕に何のメリットがあるっていうんですか？ 手が開いてたのはマリアさんの見間違いですよ」

マ（もう、ハヤテ君ってば強情ですね。こうなったら……）

マ「ハヤテ君、ちょっと失礼」

マリアはハヤテの耳に口を近づけた。

ハ「な、何ですかマリアさん！？」

マリアはハヤテの耳をぺろつとなめた。

ハ「ひいっ！！」

その瞬間、マリアはハヤテのくっついた指を引き離した。

指はあっけなく離れた。

ハ「な、何するんですかマリアさん！！」

赤面するハヤテ。

マ「ほら見てみなさい。指には接着剤なんてついてないじゃないですか」

ハ「あれっ、おっかしいなあ？ ……あ、そっか。速乾性だったからもう乾いて取れちゃったのかもなあ……あはははは」

マ（まったくもう……。それにしてもなぜハヤテ君は犯人を演じる必要があつたのでしょうか？）

その時マリアは隣に座っている歩が下を向いてぶるぶる震えているのに気付いた。

マ（西沢さん、何を怯えているのでしょうか？　まるで自分が犯人であるかのように……。いえいえ、この人はハヤテ君に気があつてナギを邪魔だと思う可能性があるとはいえ、この中では一番の常識人です。犯人である可能性は最も低いでしょうね）

マ「西沢さん、どこか体調が悪いんですか？　別の部屋で休んでも構いませんよ」

西「ご、ごめんなさい！！　ナギちゃんを殺したのは、私なんです！」

一同「ええっ！？」

マ（え、そんな……。まさか、この子が……？）

ヒ「そんな……。歩？　本当なの？」

西「本当です！　でも直接殺したわけじゃないけど……。ナギちゃんが自殺したのは私のせいなんです！」

マ（そういことですか……。少し安心しました）

西「私、昨日ナギちゃんにひどいこと言っただけです。昨日の夜遅くのことです。ナギちゃんと二人きりになったとき、ハヤテ君の話になったんです。そこで私は、ナギちゃんがハヤテ君と喧嘩してるのにつけ込んで、こう言っただけです。ハヤテ君は年上の女性が好きだから、ナギちゃんみたいな子供っぽい女の子が好きになることは絶対にない。ナギちゃんとの関係はお守りのようなものだ。こんな喧嘩ばかりしてるんなら、ハヤテ君のお守りも大変だね、って。私はいつも通りの売り言葉に買い言葉のつもりだったんですけど、ナギちゃんは泣きながら自分部屋に駆け戻っていったんです。たぶんハヤテ君の喧嘩で見た目以上に精神的に弱っていたんだと思います。年上のわたしがナギちゃんの状態をちゃんと理解して、喧嘩するにしても気遣うべきだったんだけど、つい言いたいこと言っちゃって……。それがこんなことになるなんて。本当にごめんなさいごめんなさい！！」

歩はわんわん泣き出した。

マ「大丈夫、西沢さんは悪くないですよ」

マリアは歩を抱き寄せて頭をなでてやった。

マ（でもこの位のことですナギは自殺しないと思いますが……。泣きながら逃げ出すなんていつものことですし）

沈黙が降りる中、歩の鳴き声だけがしばらく響きわたった。

そのとき、

ハ「お嬢様、もういいでしょう」

ハヤテが突然大きな声で誰に向かってでもなく言った。

すると、ドアが開き、そこから現れたのは……

一同「ナギ（ちゃん）！！」

咲「な、何でナギが生きてるんや？」

ナ「ハヤテ、ごくろうだった。なかなか見事なトリックと演技だったぞ」

ヒ「演技！？」

ナギは澄ました顔で空いた席に座る。

ナ「うむ。全ては私とハヤテの仕組んだ狂言だったのだ。みんな騙して申し訳なかった」

ヒ「なんでそんなことしたのよ？」

ナ「私の描くマンガのためだ。ハヤテに酷評されたマンガはミスリで、ハヤテはリアリティがないと文句をつけたのだ。そこで私はリアリティのあるミステリを描くべく、偽装した事件を起こして参考にすることにしたんだ」

マ「で、でもナギはあの時確かに首を吊っていて……」

ナ「マリアが見たのは後ろ姿だけだろ？ あのロープは首の脇からわきの下を通って背中に結んであったんだ。電気が消えてたからわからないのも無理はないな」

ヒ「じゃあハヤテ君が近づくなつて言ったり顔にハンカチをかぶせたりしたのは……」

ハ「はい。お嬢様の顔は死人には見えなかったし首に傷もなかったんで、それを隠すためでした」

ヒ「で、でもちよつと待って。ハヤテ君は瞬間接着剤を使ったトリ

ツクで殺人をしたふりしていたってことよね？」

ハ「はい」

ヒ「それで、右手の指がくつついてることにして手をポケットに入れてたのは、トリックのヒントをみんなに与えるためだったと」

ハ「さすがヒナギクさん。理解が早いですね」

ヒ「でもマリアさんに対しては手が開いているところを見せちゃったんでしょ？ ハヤテ君にしてはいくら何でもずさんすぎない？」

ハ「いいえ、僕がお嬢様の企みを知らされたのは、僕が首を吊ってるらしいお嬢様に駆けつけたときですから」

マ「え？ でも私はあの時のハヤテ君をずっと見てましたけど、会話なんてしてませんでしたよ。どうやってナギからトリックの説明を受けたんですか？」

ハ「トリックはその時に僕が考えたんです」

マ「じゃあ、ナギから受けた説明は……」

ハ「お嬢様からは、『ハヤテが密室殺人の犯人だということにしろ』としか聞いてません」

マ「それであの演技をしながらトリックを考えてたってわけですか？」

ハ「はい。だからあまり立派なトリックにはなりませんでした。簡単に咲夜さんに見破られてしまいましたし、結局僕が嘘についてることはマリアさんにバレてしまいましたし」

マ「で、でも何でハヤテ君はその場でそんな茶番を引き受けたんですか？ 断つても良かったんじゃないですか？」

ハ「ええまあ、そうですが。ナギお嬢様は一応僕の主人ですし、この前は怒らせてご迷惑をおかけしたっていうのもありますし……」

ナ「まあハヤテはよくやった。みんなも協力してくれて感謝する。今度こそハヤテを唸らせるような面白いミステリが描けそうだ」

ヒ「ってナギ……そんなことで済むと思ってるの！ 本気で心配したんだからね！」

咲「その通りや。悪ふざけにしては度がすぎるで！ ブラックユー

モアいうても限度つてもんがあるんや」

ナ「な、何をそんなに怒っているのだ！？　ちよつとしたクリスマス
スの余興じゃないか。な、なあハヤテ、マリア！」

マ&ハ「……」

ヒ「絶対に許さないんだから！！」

咲「成敗してくれるわ！！」

ナ「ハヤテ、マリア、助けて……うぎゃああああああ」

マ（まあ今回ばかりはナギの悪ふざけがすぎましたね。少し痛い目
に合った方がいいでしょう）

マ「それにしても、ナギはハヤテ君との喧嘩中にもかかわらず、な
ぜハヤテ君と結託しようと思ったのでしょうか？　マンガの参考に
したかったのはわかりましたが、それだけでは理由としては弱い気
がします」

ナギがギタギタにされるのを眺めながら、マリアは何気なくつぶ
やいた。

すると隣に座っていた歩が、

西「私はナギちゃんの気持ちなんとなくわかります。喧嘩中だから
こそ、ナギちゃんはハヤテ君との絆を確認したかったんじゃないか
な」

マ「そうかもしれませんね」

西「天気も良くなってきたみたいですし、私はそろそろおいとまし
ようかな」

マ「そうですね、ご家族の方も心配してるかもしれませんし。……

ところで何か忘れてる気がするんですが。西沢さん、何か心当たり
はありませんか？」

西「え……？　あ、そういえば何か忘れてる気がします……。何か
な……？」

その時、扉がバタンと開いて、人が数人入り込んできた、

男「警察です！　殺人事件が起こったというのは、ここですか！？」
一同「え……？」

クリスマスの悲劇は、これからであった。

（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございます。よろしければ感想などお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4942m/>

ハヤテのごとく！ 「クリスマスの悲劇 ～ナギが密室殺人！？～」

2010年10月12日04時00分発行